【研究主題】　もう一歩前へ！！保呂羽の郷の「生涯学習のすゝめ」
【副題】　～学校教育と生涯学習をつなぐ少年自然の家の役割とは～
【学校・団体名】　秋田県立保呂羽山少年自然の家
【役職名・氏名】　所長　公地　望

１．はじめに

秋田県立保呂羽山少年自然の家は、昭和５３年に創立され長年地域の理解と協力を得て運営されている。令和５年６月にはこれまでの累計利用者が１００万人に達した。しかし、少子化やコロナ禍などの今日的な課題に直面する中で、次第に利用者数等が減少している。これまでも対策を練りながら必要な取組を積み重ねてきたが十分な成果をあげられていない。そこで、保呂羽山少年自然の家の歴史と伝統を大切にしながら、これから新たな時代の生涯学習施設として県民をどのように支えていくべきかを改めて見つめ直すことには大きな意味があると考える。県民が生きがいを感じる学びに出会い、心豊かに毎日を過ごすことができる支援を“もう一歩前へ！！”と進めていきたい。

２．研究の概要

（１）秋田県立保呂羽山少年自然の家について

①地域の環境、設備等の概況

横手市大森町の西部に位置し、保呂羽山や霜月神楽などが有名な地域にある。周辺にはブナやナラなどの樹木が生息し､豊かな自然環境の中でキャンプや登山、ハイキング、カヌー、野外炊飯、プロジェクト・アドベンチャー、創作活動、化石採取などが体験できる。

②利用状況の推移

年度	利用者数（人）	セカドスクール的利用者数（人）	宿泊者数（人）
令和元年	15,722	9,356	7,121
〃　２年	7,632	6,809	720
〃　３年	8,650	7,848	1,810
〃　４年	9,731	8,643	2,439
〃　５年	11,128	9,573	4,112

利用者数、セカンドスクール的利用者数、宿泊者数ともに、コロナ禍前より大きく減少したが、徐々に回復・増加の傾向が確認できる状況となってきた。おもに小・中学校の児童生徒による利用が多い。

（２）研究主題等設定の理由

学習指導要領には、小・中学校ともに自然の中での集団宿泊活動等を実施することの有用性や活動を通して道徳性が育まれることへの期待が示されている。子どもたちの人間関係の希薄化、自然体験の減少といった生活の状況の変化を踏まえ、自然の中での体験活動は重要と考えられている。また、平成２６年に秋田県立少年自然の家条例が改められ、これまで「少年」を対象としてきたものが、それらに限定されることなく幅広い年齢層の県民が利用できる施設となった。しかし、今なお多くの大人の利用には結びついていない。理由は条例改正の周知が十分でないことや、子どもたちのための施設としてのイメージが強いことなどが考えられる。そこで、前述の趣旨や課題に真摯に向き合い、県民誰もが学びに出会う機会を得られる保呂羽の郷の「生涯学習のすゝめ」を発信・推進していくことが重要と捉え、本研究主題及び副題を設定した。

（３）研究の仮説

①仮説１　→　実践１へ

自然の家が子どもたちの体験活動等を通した学びをより充実させると、たくましく心豊かな子どもが育つとともに、その多くの子どもたちが自ら興味関心を高めながら学び続ける大人へと成長していくだろう。

②仮説２　→　実践２へ

自然の家が地域とより強く連携すると、自然の家の取組が広く地域に理解・周知され、県民の生涯学習が推進されるだろう。また、子どもたちが地域へ関わろうとする意識が高まり、ふるさと秋田を大切に考える大人へと成長するであろう。

③仮説３　→　実践３へ

自然の家が大人を対象にした事業を行い新たな感動体験等を味わわせることができると、利用者はさらなる学びを求めようとするだろう。また、将来は同じような活動ができるようになりたいと考える子どもが増え、子どもたちの体験活動の質が向上したり、豊かな学びへと発展したりするだろう。

（４）検証方法

「利用者アンケート」「利用者の姿の変容」「関係外部機関の評価」の３つの視点で取組を分析し、本研究の成果と課題を検証する。

３．実践１　～体験活動等を通した学びの充実～

（１）子どもたちの成長を促す取組

①育てたい資質・能力を明確にした指導

体験活動等の「ねらい」や「目指す子どもの姿」を学校と本所で共有することが大切である。そこで「問題を発見し、他者との関わりを通して主体的に問題を解決していく力」「学びを生かし、自らの未来を拓く力」等を育てたい資質・能力に見据え、活動プログラムの構成や指導の工夫を実施してきた。また、体験活動を特別活動の学習として成立させ、各教科等の見方・考え方を総合的に働かせながら、自己及び集団や社会の問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会の参画及び自己実現に向けた実践等に結びつけることができるように指導している。

②“「問い」を発する子ども”の育成

体験の中で得られる様々な気付きは、実感を伴った深い学びにつながる。そこで、本所では全てを教えるのではなく、体験や失敗から気付かせたり、気付いたことを友だちに教えたりする経験を味わわせるように指導方法を工夫している。これらはすなわち、県教育委員会が学校教育の指針で示している最重点の教育課題である“「問い」を発する子ども”の育成の具現を図る実践である。例えばプロジェクト・アドベンチャーを楽しむばかりでなく、成功するにはみんなでどのようにしたらよいのかをよく考える活動を取り入れたり、野外炊飯で食材の下準備や水加減、着火の方法などを試行錯誤させたりするようにしている。指導者の意図的な仕掛けにより子どもたちは問題を発見し、他者との関わりを通して主体的に解決していく過程を経験することができ、獲得した知識や技能は集団や自己の問題解決に応用することが可能となる。

③主体的・対話的で深い学びの実現

各活動の成果をあげるためにはオリエンテーションが大切であるが、ただ活動の手順だけを指導するのではなく、活動の目的や内容を伝えて、子どもたちが意欲を持って主体的に取り組めるようにする。また、活動後は振り返りを行い、事前に自分が立てた目標等にどれだけ近付けたのか、自分は何を学んだのか、この体験を次の活動にどう生かすのかなどを自分と向き合って確認することが子どもたちの深い学びになる。

本所のスローガンは「確かめ合おう　大切なもの　光と風と緑の中で」である。入所の際に所長が子どもたちへ「大切なもの」とは何かを体験活動を通して考えてもらうように話をする。そして退所の際には、子どもたち個々が考えたことについて振り返るなど、自分の言動等としっかりと向かい合わせて、取り組み方や成長を確かめさせる。自他及び自己の内面との対話等を通して体験活動に自分なりの意味付けや価値付けを行い、子どもたちの学びや経験の質を高めている。

④学習指導要領に対応した学習活動の推進

学校での授業を自然の家に移して行うセカンドスクール的利用も推進している。例えば、自然素材工作には生活科の「季節の変化と生活」「自然やものを使った遊び」との関連を図った学習活動が考えられる。また、化石採取は理科の「大地のつくり」「生命の誕生と進化」と、野外炊飯は家庭科の「調理の学習」と、プロジェクト・アドベンチャーは道徳の「主として人との関わりに関すること」の学習や特別活動（学級活動）の「望ましい集団づくり」と関連を図ることができる。また、各学校のスキー授業の指導も受け入れて、各校のカリキュラムマネジメントを支援している。

（２）利用者のニーズへの対応

①安心・安全の確保

何よりもリスクマネジメントを徹底し、事故等の未然防止対策に努めることは大切な責務である。感動体験は安心・安全があってこそのもので、そのためには施設設備の安全点検及び保全管理の徹底、危険箇所の周知、枯れた樹木等の伐採、爆竹や鈴を活用した鳥獣被害の未然防止、横断歩道設置の要望及び運転手に注意を促す看板設置、食中毒・感染症等の予防、天候状況の分析及び熱中症予防の徹底などを継続して行い、事故等の根絶に万全を期している。

②一人用のテントの活用

コロナ禍では密を避けるなど、人との関わり方がデリケートになり、一人用のテント泊を希望する場合もある。大きなテントで仲間と一緒に過ごすよさもあるが、小さなテントを並べてみんなで過ごす楽しさも味わいたい利用者は多い。屋内のレクリエーションホールにたくさんの一人用テントを張って宿泊したいというような要望にも対応可能である。

また、仮に自然災害が起こり、避難等を余儀なくされた場合の模擬体験活動としても活用できる。避難所を想定したテント設営（宿泊）、段ボールを利用した個人スペース確保、災害食メニューや紙食器等を活用した食事体験などができ、もしもの場合に自分の命を守ったり、周りの人のことを考えた行動ができるようになったりする学習をすることができる。

③利便性の向上を図る工夫

ア）来所を希望する団体の入所の日程調整をして、複数団体が同日に宿泊することを避けるように配慮する。団体数が少ないと、それぞれの活動をのびのびと行うことができ、仮に悪天候の場合でも、屋内の活動に選択の幅を持たせることが可能となる。

イ）大人数の子どもたちが大きな荷物を持って来所した場合、玄関の靴だな前が混み合い、指導に時間がかかることが課題になっていた。そこで、靴だなを使用せず、代わりに玄関ホールにブルーシートを敷いて荷物等を管理させ、人の流れをよくしたり、同時に多くの人が動けるようにしたりする工夫をした。

ウ）多くのプログラムを経験したい場合は活動場所への移動時間を短縮させたい。そのために、本所のバスを活用した移動を積極的に行う。自然を満喫しながら徒歩で移動することも大きな価値があるが、より多くの時間を活用したい、より多くの体験をしたいという要望にも応えることができる。また、悪天候時は子どもたちの徒歩移動による負担を大きく軽減できる。

４．実践２　～地域との連携強化～

（１）地域の方々が自然の家の運営に関わる活動

少年自然の家の運営は「協働会議」や「ほろわんぱーく友の会」を開催し地域に広く発信している。地域や関係機関及び各ボランティア団体の代表者に役員や委員等を委任し、それぞれの立場から意見や要望をいただく。このことにより、全体で本所及び地域の課題を共有しながら運営に当たることが可能となる。

（２）自然の家が地域とつながる活動

保呂羽山少年自然の家は坂部地区と前田地区の中間点に位置し、両地区を結びつける拠点としての役割を果たすことができる。これまで保呂羽地区交流センター（前田地区）が主催してきたほろわクリーンアップの行事を、保呂羽山少年自然の家を起点とした事業にしたことで、両地域の方々が自然の家に集まる機会になるとともに自然の家の所員が地域の方々と共に活動できる機会を創り出すことができた。このことがお互いの活動をよく理解するきっかけとなった。また、これらの情報交換を通して他の公民館事業や別団体の事業にも本所が関わることにもつながった。例えば、公民館の陶芸製作や福祉関係施設の自然素材工作などへ、本所の所員を派遣することができ、お互いの事業の拡大や充実を図ることができた。

（３）自然の家が来所者と地域をつなぐ活動

本所に入所した小学生のグランドゴルフ体験を地域の愛好家の方々と一緒に行う機会を設定した。ルールや技術指導は地域の愛好家の方々に依頼し、活動を通してお互いの交流を深めることができる。通常では交わることのない団体どうしが、本所の活動を通して新たに出会い、新たな交流が生み出された。

５．実践３　～大人を対象にした主催事業の開催～

（１）ほろわｄｅ大人のアウトドア塾

新たに企画した主催事業である。令和６年５月１２日（日）に実施した。午前はハイキングをしながら山菜採りを行い収穫したものをさっそく天ぷらに調理して食した。午後はファイヤースターターを使ったたき火体験や椎茸の植菌作業などを行った。また、家族と一緒に参加した子どもたちにとっては、他の事業等では味わうことができない体験をすることができた。

（２）大人のミステリーツアー

第２弾として現在企画中で、開催は令和６年１０月１２日（土）の予定である。行き先はスタッフのみが知っているという設定とし、参加者の興味関心を高め大人の探究的な好奇心を刺激する社会見学ツアーになるよう計画中である。他の関係機関との連携も含め、広い分野の体験が提供できるよう調整している。

（３）新しい事業案の開発

今後は大人のさわやかソロキャンプ、大人のキャンプ飯、大人たちのプロジェクト・アドベンチャー体験などが考えられる。また、大人が楽しんだ体験に子どもたちが興味を持つことも期待できる。体験活動の難易度を高めることが子どもたちの感性を刺激し、追究の意欲を高める。このように、もっと上のレベルを求めたい子どもたちの受け皿にもなることができる。

６．検証結果について

（１）「利用者アンケート」の分析

項目	評価５	評価４	計
①総合的な満足度	80.6 %	15.5 %	96.1 %
②打ち合わせや相談	82.4 %	13.7 %	96.1 %
③職員の指導・支援	89.4 %	7.7 %	97.1 %
④野外活動コース	72.3 %	26.6 %	98.9 %
⑤施設・設備	53.8 %	34.6 %	88.4 %
⑥食事	46.5 %	36.0 %	82.5 %

実践１に係る利用者アンケートを、５段階評価で行った。項目①～⑤において評価５（とても良い）と評価４（良い）を合わせた肯定的な評価は８５％を超える状況である。また、利用した学校の教員からは「子どもたちに考えさせる場面が多くあり、多くの子どもたちが主体的に取り組んでいた」「子どもが仕事を見付けて働こうとしていた」「いつもの学校生活とは違った子どもの姿が見られた」「自分や学級にとって大切なものを真剣に考えていた」などの声が聞かれた。

（２）「利用者の姿の変容」の分析

実践１により、子どもたちが具体的な問題について話し合い、実践を通して協働して解決を図る態度が身に付いた。発達の段階に即して集団決定や自己決定する力が育まれている。「問い」を発しながらよりよい解決を目指す学びの過程が確認できた。合意形成につながる話合いをしたり、他者と協力して解決したりする様子は、すなわち本所が育てたい資質・能力を具現化した子どもの姿である。また、教員などの指導者の意識にも変容が見られるようになり、これらの学びの成果を期待したセカンドスクール的利用が増えている。実践２は、地域の大人の生涯学習の意識を高めるとともに地域とのつながりを大切にしようとする子どもたちの意識にも変容が見られた。実践３も好評であり、参加者の視野を広げたり、達成感を味わわせたりすることにつながった。子どもたちにも大人が行った体験を味わわせたいという声も多くあった。

（３）「関係外部機関の評価」の分析

協働会議及びほろわんぱーく友の会より、実践１は安心・安全のもとで望ましい体験活動が実践されている、実践２は双方に成果があり互いの個性や得意なことを生かして幅広い年齢層をカバーしている、実践３は大人たちの学ぶ意欲を向上させるとともに子どもたちへもよい影響を与えている、今後も新しい挑戦を続けてほしい等の肯定的な評価をいただいている。

７．考察

実践１については、将来の大人を育てる、未来の世の中をつくるという観点で長期的な育成を図ることが大切である。県教育委員会との連携のもと健やかな子どもたちの成長を願い、適切な体験活動の提供を継続していくことで、将来の生涯学習に結び付けていきたい。実践２と実践３については、少年自然の家の利用対象が少年に限ることなく幅広い年齢層の県民を対象にしたことの周知や、一層の親しみをもって気軽に利活用できる生涯教育施設になるための中・短期的な施策である。大人の生活は多様であり、各キャリアステージにおいて仕事や家庭、子育てや介護など抱えているものは人それぞれである。しかし、様々な文化や芸術に触れ、心を豊かにしたり、より楽しく生活したり、周りとの関わりで自身の考え方を広げたりすることは、それからの幸せな暮らしの創造につながっていく。そして、全ての県民の豊かな人間性はこれからの未来の世の中を創る素晴らしい活力ともなるに違いない。

本研究の各仮説を基にした３つの実践は、検証結果から考察すると、それぞれ成果があったと結論付けられる。そして、学校教育と生涯学習をつなぐ自然の家の役割としてのこれらの実践は、今後の県民の学びや暮らしに影響を与える取組になり得る。しかし、大切なのはこれからも小さな実践をしっかりと積み重ねることである。「やってみると楽しい」「いっしょにやろう」などの経験者の口コミが広がり、やがて多くの県民が豊かな暮らし方のヒントを得たり、学び合ったりする場となるよう、実践の質を高めていきたい。

８．終わりに

これからの「人生１００年時代」「超スマート社会（Society5.0）」に向けて、生涯学習の重要性は一層高まっている。一人一人が生涯を通して学ぶことのできる環境の整備、多様な学習機会の提供、学習した成果が適切に評価され、それを生かして様々な分野で活動できるようにするための社会の仕組みづくりなどは県民からも大きく期待されている。そのためにも保呂羽の郷の「生涯学習のすゝめ」は歩みを止められない。これからもアンテナを張り、情報を敏感に捉え、対応のアイデアを生み出していく。学校教育と生涯学習をつなぐ保呂羽山少年自然の家の挑戦にゴールはない。

参考文献等

○小学校（中学校）学習指導要領解説／文部科学省
○令和６年度学校教育の指針／秋田県教育委員会